

日本学術会議 幹事会附置委員会
フューチャー・アースの推進に関する委員会（第23期第1回）
議事要旨（案）

1. 日 時：平成26年12月11日（木）13:00～15:00

2. 場 所：日本学術会議5階5-A（1）

3. 出席状況

フューチャー・アースの推進に関する委員会

出席者：西條委員、向井委員、武内委員、大西委員、江守委員（スカイプ）、沖委員、春日委員、小池委員（スカイプ）、三枝委員（スカイプ）、中静委員（スカイプ）、中島委員、安岡委員、安成委員、山形委員、山本委員、大手委員、蟹江委員、谷口委員、福士委員（19名）

欠席者：杉原委員、巖佐委員、中村委員、花木委員、氷見山委員、植田委員、小林委員、春山委員、毛利委員、植松委員（10名）

オブザーバー：文部科学省研究開発局 木下環境科学技術推進官

文部科学省研究開発局 高木技術参与

大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球学研究所 Hein Mallee 教授

事務局：山田次長、盛田参事官、佐藤参事官、坂本補佐、辻上席学術調査、河野上席学術調査員、佐藤専門職、熊谷専門職付

4. 配布資料：

資料1：フューチャー・アースの推進に関する委員会設置要綱及び設置提案書

資料2：Future Earth 科学委員会・関与委員会会議関係（抜粋）

資料3：Strategic Research Agenda 2014

資料4：フューチャー・アース（Future Earth）の国際動向

追加資料1：Future Earth に関するブエノスアイレス会議（概要）

追加資料2：Future Earth に関するブエノスアイレス会議 Engagement Committee
部分の報告

追加資料3-1：SIMSEA 南・東アジアの縁辺海の持続可能性イニシャチブ

追加資料3-2：Future Earth Young Scientists Networking Conference on
Integrated Science

参考： 委員名簿

5. 議 事：

（1）委員の紹介

当日出席委員により自己紹介が行われた。

（2）委員会設置の説明

大西委員より、資料1に基づいて本委員会設置について説明が行われた。

本委員会では、幹事会附置として設置され、フューチャー・アース（以下、FE）への具体的な取組等（FEの推進に関連する諸課題の整理・審議、関連する研究者等との連携、FEの国際事務局や国際科学委員会等との連携、国内のステーク・ホルダーを含めた日本学術会議外の体制・組織との連携の進め方）について検討する。

（3）委員長の選出、副委員長・幹事の指名と承認

互選により、安成委員が委員長に選出された副委員長として杉原委員が、幹事として江守委員及び蟹江委員がそれぞれ指名され、出席委員から承認された。

（4）委員会の役割について

【経緯説明（第22期からの申し送り含む）と今後の方向性と国内外の対応に関する議論】

安成委員長から、資料2及び追加資料2に基づいてFE及び本委員会の経緯について説明が行われた。

続いて、安成委員長と春日委員から、追加資料1に基づいて、12月に開催された国際合同委員会（科学者委員会と関与委員会）のブエノスアイレス会議について紹介が行われ、Strategic Research Agenda (SRA) 2014の決定と公表、FTI(First Track Initiatives)/Cluster Projectsの状況、GEC/Core Projects (CP)について、フラッグシッププロジェクト (Flagship Projects、FP) について、ガバニングカウンシル：評議会、等の説明があった。

具体的には、春日委員より、フラッグシッププロジェクト (FP) について、次のような説明があった。ブエノスアイレス会議では、フラッグシッププロジェクト (FP) 、すなわち「短期間、少額資金で、FEを例示するためのプロジェクト」として適当と思うテーマを挙げるよう要請があり、9つのテーマが提案された。参加者から透明性に関して疑問が呈された結果、FPという名称から再考する必要がある、今回の選択活動はプロジェクト選考のためのエクササイズであるとの説明が行われた。2015年1月15日までに、SC、EC委員は9つのテーマに関する意見と、9つ以外の適切なテーマを回答、その後2月15日ごろまでにアライアンス等の意見も聴きつつ、SC/EC ChairsがFP(仮称)を選考する予定である。

また、春日委員より、ガバニングカウンシル：評議会について、次のような説明があった。12月5日のアライアンスと5カ国国際共同事務局チームとの会合が行われ、その場で、意思決定機関であるガバニングカウンシル：評議会についての説明が、アライアンスから行われた。そこでは、アライアンスが、ガバニングカウンシル：評議会となることを決めたという発表があった。これに対して、日本としては、唐突な説明であり、事前にステーク・ホルダーへの相談もないなど、透明性も含めた問題がある旨伝えている。しかしながら、他の国際共同事務局の国は比較的好意的に認識していた。それは、アライアンスが全体にコミットすることによって、他の国連組織等のコミットが強化されるということにつながるためである。

引き続き意見交換が行われた。主な、議論等は次の通り。

■コアプロジェクト Core Projects (CP)について

- ・コアプロジェクト Core Projects (CP)とはなにか。
- 1980年代から行われてきた4つのプログラムの下にある23のプロジェクトがCPである。これらに全体で6万人の科学者が関わっている。4つのプログラムがFEに組み込まれることに伴い、23のコアプロジェクトの多くがMOUをFEと結んで、FEの傘下に入ってくるようである。ただし、FEの傘下に入る際には、ただ単にマージするというのではなく、ステーク・ホルダーとの連携が求められる。
- ステーク・ホルダーとの連携といった時に、プロジェクト内でのステーク・ホルダーとの連携なのか、それとも、プロジェクト間の連携の中でさらにステーク・ホルダーとの連携なのか、見えてこない。また、単により予算が獲得しやすいため、科学者が予算を消費するために、こうした言い方をしているだけということはないのか。
- ステーク・ホルダーとの連携のあり方は、両方ありうる。また、単に見せかけではなく、実際にステーク・ホルダーとの連携がプロジェクトの中できちんと位置づけられる必要がある。アライアンスにファンディングエージェンシーが入っており、この点を評価に入れたうえで、MOUを結ぶので、現時点では2つのプロジェクトのみが、結べているに過ぎない。また、科学者が予算を消費するためというより、科学者も社会に役に立つという志向になるように向ける仕組みであるといえる。
- ・FEが、コアプロジェクトのような昔からあるものを、「コア」と位置づけることに違和感がある。同じ名前で同じ人たちが引き続き、FEの傘下でプロジェクトを行うのはおかしいのではないか。
- コアプロジェクトではなく、レガシープロジェクトとすればよいのではないか。
- 日本もFEの取り組みを始めた。JSTがFEのコンセプトに合うものを募集している。日本は、ゼロベースでプロジェクトを始めており、進んだ取り組みであるといえる。

■フラッグシッププロジェクト Flagship Projects (FP)

- ・FPの話は、唐突に出てきた印象がある。また、FPやCPなど色々な種類のプロジェクトがたくさん提示され、それぞれの定義と透明性の確保に問題がある。
- 11月20日の『Nature』に、FEはFPを持つべきだという記載があったが、それが影響している

のではない。

- ・ Strategic Research Agenda (SRA) 2014 と FP の関係はどうなっているのか。
- SRA はサイエンスコミッティが募集して取りまとめた。FP は、SRA の 8 つのチャレンジ等とインテグレートした形で、提示されるべきであろうが、今の案はそうっていない。これは問題であるとする。
- ・ FP は、出てきたプロセスに問題がある。ただ、FE の課題解決のためにはこういうものが必要であろう。例として SDGs の FE プロジェクトは、数年前から続いており、23 のコアの関係者から形成されている。今のコア中心から、FP 型の新たな問題解決型に変わっていくのではない。
 - ・ 今提案されている 9 つの FP が絞られるというのは現実的であろう。例えば power & politics といったテーマが担える組織があるのか。
- FP については、SC としてもコメントを出せるので、9 つのテーマに関する意見と、9 つ以外の適切なテーマについて、2015 年 1 月 15 日までに示して欲しい。

【FE への支援のあり方と、ガバニングカウンスル：評議会】

- ・ FE 本体の取り組みに関しては、日本学術会議としても支えていくべきであるが、それに当たり、日本をベストプラクティスとして示していけるとよい。そのためには、日本学術会議と Ristex の WS と連携すること、そして、日本学術会議内に国際事務局のあり方の検討委員会を新たに設けることなどを検討する必要がある。
 - ・ 評議会にアライアンスが入ると、膨大な研究者が関わることになるが、問題はないのか。
- アライアンスの各組織全員が評議会に入るというよりは、各組織の代表的な人が評議会に入り進めていくというイメージである。

【ICSU の他のプロジェクトとの連携】

- ・ ICSU の大きなテーマとして、FE の他に、Urban Health and Wellbeing がある。Urban Health and Wellbeing は、しっかりした体制を持っている。現在では FE から外れているが、FE のモデルのようになっている。FE はこれらともっと密接につなげるように提案すべきではないか。
- ICSU で、IRDR、Urban Health and Wellbeing、FE の 3 本柱はもっと連携する必要がある。
- 関連情報として、2015 年 1 月に、日本学術会議、国連国際防災戦略事務局 (UNISDR)、災害リスク統合研究 (IRDR) 等主催により、「防災・減災に関する国際研究のための東京会議－災害リスクの軽減と持続可能な開発を統合した新たな科学技術の構築へ向けて－Tokyo Conference on International Study for Disaster Risk Reduction and Resilience」が開催予定である。

【その他関連する事項の説明等】

この他、リージョナルコミッティの重要性、日本学術会議の体制の検討、SIMSEA の取り組み等について説明等が行われた。

■リージョナルコミッティの重要性

安成委員長より、リージョナルコミッティが重要である旨説明があった。その理由の一つとして、ナショナルコミッティが作れる国が少なく、例えばアジアでは、日本や中国に限られる可能性があるということであった。

■日本学術会議内の体制の検討

安成委員長より、日本学術会議内にある IHDP 等の FE に関連する分科会の取り扱いを今後どうするかが検討事項である点が、当日欠席の氷見山委員からのメールの紹介と共に、指摘された。

■SIMSEA の取り組み

・ 山形委員より、追加資料 3-1 及び 3-2 に基づいて、SIMSEA の FE への対応について紹介があった。

(5) その他

【フラッグシッププロジェクト：FP へのコメント募集】

各委員は安成委員長あてに、「現在の FP 案である 9 つのテーマに関するコメントと、9 つ以外の適切なテーマに関するコメント」を適宜送付することとなった。

【次回の開催について】

1月末から2月ごろに開催することで調整することとした。なお、開催頻度は2カ月に1度程度を目途とすることとした。

以上